

田吾作は、道がに呆れて、あつちの繪看板、此方の寫真などに見惚れて居たか、

「待てよ。乃公かう見えても、村の祭りの時に来たときに、小屋がけをするのに材木さあ貸してやつただから、只の札を持つて来ただから、活動寫真を見たことはあるが、東京見物に来て、淺草の活動寫真も見なかつたと云はれちや、はあ田吾作の肩身が狭え、ごつか一つ一番安いところに入つて見べえ」

田吾作は、何でも安くさへあれば宜いのだ。

あちら此方と見歩いて居たが、急に眼を圓くして、

「ヒヤアぶつたまげた。あの窓の中さ居て、切符を賣つてる女つち

よたちや、あんちう面の皮の厚いやつらだんべえ——こんな人込みで、みんなが見てるのに、鏡と首ツ引きをして、塗るわ塗るわ、あんちう顔だつべえや、まるでア化物だ。あれでもハア人間の娘だつべえか」

テケツの女たちを、呆れて見て居た。けれどもボンヤリ立つては居られない。

「此處さ一つ入つて見べえ」

ヅカ〜とテケツの窓口、

「乃公ア活動寫真見るだが、いくらかアね——アニ特等だの一等だの、そんなどこでなくともえ、だ、一番下等のところで——ア二十錢

けえ、どうだんべえ乃公はア村で見たことがあんだから、ほんの一幕見れば宜えだ、半額に負かんねえかの』

『そんな譯には往きません』

『ンかね——』

田吾作大枚十錢を拂つて、ツカ／＼中に入ると、

『どうぞ此方へ——』

女給が手をとるやうに、手を伸して居るが、さりどて田吾作の手を握らない。

『ハハアこれだな、棕次郎が美しい女ちうたのは、なるほどはア白粉塗つてるだから、色だけは眞白だが、鼻が空向いて、齒が反ッ齒

頬ぺたが、ブタ／＼で髪がちぢれて、見つたくねえ、棕次郎の眼にや、そんなに美え女だと見えたつべか——』

かう思ひながらも、田吾作は、若い女の手に、自分の手を握られないので、手を差し出したが、女給は握らないで、

『此方へ——』

『どうぞだごこた』

田吾作故とマゴ／＼してゐる、かうしたら手を握つて呉れるだらうと思つて——ところが女給は握らない。

『此方ですよ』

ちよいと尻上りになる。

「手を引いて呉んねえと分んねえ」

「分つてるぢやありませんか、此方ですよッ」

半ば叱るが如く――

田吾作がマゴ／＼してゐるので、後の見物は、

「何をグヅ／＼してやがんだい、後の者は見えねえぢやねえか。早

く腰かけろよ、田吾作ッ――」

と、嗚鳴つた。

田吾作は吃驚、

「オヤッ、乃公の名を知つてやがるとすると、誰れか乃公を知つて
るものがハア來てるに違えねえ、歸つてから、田吾作がかうだつた

あゝだつたと云はれちやなんねえ」

と、あはて、女給が指したところに行つて腰かけて、

「ハテ誰れだらう」

と、田吾作活動寫真の方どころか、田吾作と云つた方ばかり見て居
たが、誰れも知つたものはゐなかつた。

活動寫真から出た田吾作、

「やつぱしハア東京の活動寫真は違つたもんだ。待てよ、富士山が
眼の下に見えるといふ、十二階ちうのはどこさあるだらう」

田吾作高い空ばかりグル／＼見廻したが見えない。

「ハアちよつくら訊ねやすが、十二階ちうなアどこさありやすかね

「なんだ十二階、十二階なら、お前さんの眼の前にあるぢやないですか」

見るとなるほど、赤煉瓦の、またないヒヨロ高いものが立つて居る。

「ハアあれかアね」

「さうですよ」

「あんだつまんねえ。オヤ／＼曲んでやがるぞ、危ねえもんだなア——江戸繪で見ると、赤やら青やらで美しいもんだが、あんだつまんねえ——だがあすこさのぼるにや、どつから行つたかね」

「其處に切符を賣るところがありますから、あすこで切符をお買ひになれば、歩かないでも、エレベーターと云ふ機械で登れます」

「ンかね」

田吾作テケツの窓口に來て、

「ハア乃公十二階ちうのに登りてえが、大丈夫かな」

「何がでございます」

「何がちうて、ぶつ倒れかゝつてるが、倒れるやうなことはなかんべか」

「オホ、、、大丈夫ですよ」

「ンか——」

田吾作は、切符を買つて入る。やがてエレベータでスウ——

「あッ、あッ、あんだか氣味が悪い、もうのぼるなア止めるから、止めて呉んろ、止めて呉んろ」

と、大騒ぎをやらかすうちに、いつしか頂上、

「なるほど高えなア……アッ下を見ると眼がまはるぞ——」

田吾作は、あつちこつちと、キヨロ〜、見廻してゐる。云ふまでもなく富士の山を見つけてゐるのだ。

ところが、どうしても富士の山が見えない、見えるものは、眞ッ黒の煙を吐き出して居る煙筒や、家の屋根や、近くの物乾しに赤くピラ〜ひるがへる腰巻や、白くなびく源氏の白旗ばかり、

「モシ〜、富士の山はハアどこに見えやすかのう」

此處にのぼるものは多くは田舎ものか、それでなければ、子供かだ。

田吾作は、矢張り傍にゐた田舎者らしい男にかう訊いた。

「サア、乃公も、東京の淺草の、十二階ちうものに登ると、乃公が在所もよく見えるちうだから、どのあたりに見えるかと、思つてかうして見てるが、一向見えませんから、不思議に思つてるんですがんす」

「へエ、乃公もあんだ、東京見物さして來た。椋平の次男坊の椋次郎が、十二階から見ると、富士の山が眼の下に見えるちうたで、ど

「こさ見えるべえと、見てるだがちつとも見えねえだ」

「さうでがんすか、おかしいなア」

「お前の在所ちうなアはアどこだね」

「俺でがんすか、わしは九州の筑後でがんす」

「へエ、九州ちうと、ずるぶんはア遠えでねえかの」

「ハア、昔はこれからお江戸は三百里ちうだから、三百里位はある

と見えやんす」

傍で聞いて居た男は、クス／＼笑つて居た。

□エヘンエヘン

翌日は田吾作、其處でマゴツキ、此處でマゴツキ、やつこのこと
で丸の内に來て、皇居を拜し、棕次郎が云つた。日本一の芝居小屋
帝國劇場に行つて見ようと、幸ひと其處に來た一人の小僧に、

「小僧さん、小僧さん、帝國げつき場ちうなアどこだアね」

「エ、帝國げつき場……知らねえな、帝國劇場なら直ぐ其處だが
……」

「ンだんだ、そん帝國げつき場だ、どこだアね」

「それなら、それ向ふに白い大きな家があるでせう、あすこだい……」

……」

「さうかアね……」

田吾作は、八重洲町の大建築に、眼を剥きながら、帝國劇場の前にやつて来て、

「ヒヤアぶつたまげた。これでハア芝居小屋かアね。なるほど、看板が出てる、あんだ……家の立派で大けえ割にしちや、看板がちつぼけたな、何でも中を見るばかりでも話のたねちうこつだつただから、一つ中に入つて見べえ」

ヅカ〜と這入らうとすると、

「ア、モシ〜、何處に行くんですか」

「どこに行くつて知れたこつだ。中を見物に行くだ」

「ぢやあちらで切符を買つて下さい」

「さうかアね、して見ると何かね、切符を買はなくちや入れねか」

田吾作はチケットに来て、

「切符を下せえ」

ど、窓から覗くと、中に居た女は、

「ハイ五圓いただきます」

「五厘錢は合憎無えから、一錢で剩餘貰ふべえよ」

「エッ……」

あまりのことに、テケツの女先づ吃驚、

『五厘ぢやありません、五圓ですよ』

『エツ……』

今度は田吾作が吃驚仰天、

『あんだ、五、五、五圓だ』

『さうですよ、特等御一人様五圓で、二等四圓で、三等三圓、四等一圓ですよ』

『コリヤぶつたまげた。いくら話の種でも、五圓も四圓も三圓もおろかなこと、一圓だつて出せるもんでねえ。ンぢや、中に入るなア止すべえ』

『さうですか……』

お前なんか、帝劇に来る柄ぢやないよ、といふやうな面、

『一體、中はどんなになつてるだアね』

田吾作は、真鍮なた豆の煙管で、煙草を吸ひながら、テケツの女に聞いた。在所に歸つて、帝國劇場の、中はこれ〜だと、見ないで見た振りをして話さうと云ふ目論見、

『中はどんなと云つて、芝居をするやうになつてゐますよ』

テケツの女は、釘を曲げたやうな字で、艶文か何かを書きながら小うるささうに答へた。

『フウン……』

ボン／＼と掌に吸ひ殻をはたき出しながら、

『あんでも中はハア立派だちうが、どんなになつてるだアね』

『どんなになつてるかと云つても、なか／＼口で説明は出来ません
……』

『フウン、して見るとあんだな。立派さは、とても口に云はんね
えといふだアな……』

其處に立つて居られては、邪魔ですから、ごうかあつちに行つて
下さい』

『ハアさうかアね、これはこれは……』

田吾作はあはて、吸ひ殻をはたき出して、煙草入れの筒にさし

て、

『よしよし、帝國げツき場にも入つて見たが、とても立派さは口に
や云はれねえと云ひやそれで好い、まてよ、狂言は何だつたかちう
たら、何と云ふべえしまつたツ、そいつを聞いてくだつた。聞いて
来ようか、イヤニあの女つちよ威張つてゐやがるから、聞きに行く
のも忌々しい……よし／＼、狂言を聞いたら、岩見重太郎の、狛退
治をやつたと云やア好え』

田吾作帝國劇場の、狂言を獨りで定め込んだ。

それから日比谷公園にやつて来た。

『ヤア、此處には鶴の口から水が出てらア』

ど、あの貧弱な噴水でも、田吾作の眼には珍らしい。

田吾作はとあるペンチに腰を下して、煙草をスツパスツバ吹かして居ると彼方から来た。若い男と女、男は角帽をかむつた大學生、女も女學生らしい、袴こそつけて居ないが、田吾作が見て居るとも知らず、手を握つて見たり、肩に手をやつて見たり、

「オヤ、とんでもねえところ、を見せつけられるもんだなア……こんなとこでさへあれだから、乃公たちが村のやうな、人の滅多に來ねえやうなとこにでもあいつらをおつぽり放さうもんなら、それこそハアどんなことをするか知れたもんでねえ」

田吾作は、もう見て居られなくなつた。

「エ、ン……」

ど、一つ咳をすると、驚ろいた二人が、急に飛びはなれて、

「もう直きに花が咲きますねえ」

「まつたくねえ」

「ウフ、、、、ゴマ化してやがらア」

田吾作は廣ひ日比谷公園の中を、ブラ／＼歩き廻つた。其の實は出口が分らなくなつたのだ。早い話が田吾作は、日比谷公園の中で迷ひ兒になつた譯だ、其のうちに衆議院の前に出た。

「モシ、此處は何するうちかね」

ど、一人の書生に訊くと、

「此處かね、此家は代議士が集つて、國家の政治を討議する衆議院の議事堂」

「モシ、書生さん、お前さまは、教育ちうもんがある人にも似合はねえ人だのう」

「どうして」

「どうしてちうてさうでねえかよ」

「何でだね」

「何でだねちうて、乃公が田舎者だから、なぶつてやるべえと思つて、そんな分んねえことを云つて、乃公アハア百姓の田吾作ちうもんで、何にも知んねえだ。そんな毛唐の言葉なんかで云はねえで、

日本人なら日本の言葉で云つて下せえよ」

「ハ、ハ、ハ、僕は別に外國の言葉を使つた譯ぢやないよ」

「ンだつて、日本人の乃公に分んねえところを見ると、毛唐の言葉に違えねえだ」

「イヤ僕が悪かつた」

「それ見なせえ、兜を脱いたつべえ」

「悪かつたといつて謝罪つたからと云つて、何も僕は外國人の言葉ををつかつたんぢやないが、君に分らないやうな言葉で、物を教へたといふのは、たしかに僕が悪かつたといふのさ」

「ンぢや何かね、今お前さまが言はつしやつたやうな言葉があるか

アね

「ハ、ハ、ハ、困つたなごうも……あるよ」

「乃公初耳だ。もう一遍云つて見て下せえ」

「弱たなア、もう一遍言ふことはないよ。此家はね、そら代議士は知つてるだらう」

「代議士ちうと、甘めえもんかね」

「困るな、代議士といふのは食ふものや飲むものぢやないよ」

「ンぢや何アね」

「代議士が分らないぢや……ぢや國會議員と云つたら分るだらう……」

「ア、ハ、ハ、ハ、こくさやアぎんかアね、あれなら知つてるだ。乃公が方からも、□瀬□市ちうのが、そんなこくさやアぎんさなつて出てるだから」

「ブツ……その何さ、こくさやアぎんが集て、いろく、國のことを議論するところだよ。つまり相談するところだよ」

「ハア分つた。ンぢやこくさやアぎんが、此家で論判をするところかね」

「ハ、ハ、ハ、さうだ、さうだ」

「さうけえ」

田吾作は、口をポカンと開けて見廻して居た。

『して見るちうと、乃公が運動ちうものをして、こくきやアぎんにしてやつた。〇瀬〇市ごんも、此家でしやべるだなア、さうださうだ。乃公一番、〇市どんを訪ねてやんべえ』

と、田吾作思ひついたのは、故郷選出の代議士訪問である。

白羽の矢を立てられた。代議士こそ迷惑千萬。

『待てよ、一體どこさ泊つてるだか分んねえな。誰れかに聞いて見べえ、こくきやアぎんちうもなア、偉えもんだちうだから誰れでも東京の者なら知つてるべえ』

見ると向ふから、一人の職人體の男がやつて來た。田吾作は其の男を擁して、

『ちよつくら訊きやすが、乃公たちの方から出てるこくきやアぎんの〇瀬〇市ちうもなアどこさ泊つてるでがしよ』

職人些か面喰つた、些かどころか、大いに面喰はざるを得なかつた。

『何だつて、こくきやアぎんの〇瀬〇市たつて、分んねえなア』

『偉え、こくきやアぎんの〇瀬〇市を知らつしやらねえの』

『偉えか偉くねえか知らねえが、俺アそんなものは知らねえ』
職人は面喰ひながら行つてしまつた。

すると今度は、髯を生やして、洋服を着た男がやつて來た。

『ちよつくら訊ねやすが、乃公が村から出てる、こくきやアぎんの』

「瀨口市といふもなア、ハアどこさ泊つてゐますべか」

紳士はちよつと面喰つたが處がちやうど衆議院の前だから、こくさやアぎんが國會議員であるといふことも覺ることが出来た。

「ア、國會議員口の瀨口市といふ人の宿を訊ねるのかね」

「ハアさうでがすよ。お前さまは偉えや、今あすこさ行く男さ訊いたが、とぼけたやうな面アして、乃公知んねえちうて行つてしまつただが、矢ツ張し學問のある人は違つたもんだ。あんな無學問の奴なんか話になんねえ……」

さう云ふ田吾作御自分が、こくさやアぎんで無學を標榜してゐるとは御存じない。

すると紳士は、ニコ／＼笑ひながら、

「ぢやちよつと待つてゐなさい。調べて来て上げよう」

「さうかアね。ハア濟まんこつたのう」

紳士は門衛の方に行つたが、しばらくすると出て来て、手帳の紙に、萬年筆で記したものを田吾作に示しながら、

「あのね、此處に書いといたが、京橋八官町の大西屋旅館だといふことだが、此處で道を教へてもちよつと分らないが、今から行くのかね」

「ウンニヤ、行くなア明日行くべえと思つてゐやすだが、只だ處せえ分つてりや、あぢよ(どう)してでも行きやすだ」

『さうかね、ちやこれを持つて行くが宜い』

紳士は、口瀬口市が宿泊して居る。宿屋を記した紙片を田吾作に渡した。

『ハアさうかね、どうもハア有り難うがした。御親切にハア……濟まねえこんでした』

田吾作は、帽子をとつて、叮嚀にお辭儀をした。

紳士は行つてしまふ。

『ちつとべえ學問があるちうと、そいつをハア鼻さかけて威張るもんだが、偉え、あの人は、よつほど出来てるに違えねえ。うんと出来てるもな威張んねえが、ちつとべえの學問をしたもんが、ツン

く、威張るもんだ』

と、頻りに紳士の後姿を見やつて、田吾作感心してゐた。

やがて其の紙片を、大切にたゝむで、財布の中に入れた。

『ハア、これせえありや大丈夫だ、どうか田吾作さん、一人でも宜えから、乃公が方さ投票して呉れるやうに骨を折つて呉んちうて頭をハア下げた口市ぞんだ。乃公が訊ねて行つても、會はねえこたアあんめえ、そんなことさして見ろ、此次ぎから、村中のものみんなに話のうして、投票なんかする事だねえ。明日になつたら、一つ出かけて見べえ』

と、田吾作はブラ／＼歩き出した。

歸りに東京驛を見物して、マゴツキながらも、其の日は宿に歸つて來たが、丸の内から日比谷、東京驛の見物で、遂々一日はおじやんになつた。

勘定づくから、晝食を食はないで、ペコ／＼腹を抱へて歸つたのだから、田吾作十一杯を平らげて、宿屋の女中に肝をつぶさした。女中が此の事を、お内儀に話すと、お内儀は面をしかめて曰く、『此の節の米の高いのに、串戯ぢやない十杯も十一杯も喰はれてたまつたものぢやない。宿屋の飯といふものは、大概三杯がきまつたやうなものだ。三杯以上喰ふものは、滅多にありやアしない。お腹は空いてゐても、體裁といふことを考へるから、四杯と喰ふものは

あと一杯目を出すときは、小さくなつて、ア、どうもお腹が空いてゐたとか、米か好いなんて、文句をつけて喰ふ位なんだのに、あんな田舎ツペだから、そんな體裁なんかありやしない。宿に歸りやア麥七分に米三分の飯を喰つてるもんだから、喰ひためをして行くつもりに違ひないよ僅かな旅籠錢で、そんなに喰はれちや稼業にならないから、明日からあの田舎ツペのだけは、東京米でも買つて來て炊かなくちや』

と、云ふ騒ぎ、

果してお内儀が云ふ如くんば、旅館に就くものは、三杯目にはそつと出しの、居候と何等擇ぶところが無い譯だ。

一室で聞いた田吾作、

『オヤ、ひでえことを云つてやがるぞ、四杯目にはそつと出すもんだなんて、食ふのまで遠慮して、腹空かしてゐなくちやなんねえ位なら、あにも宿屋に泊ることもねえだ。金を出して居候扱ひにされてりや世話ねえや』
 しかしながら、十一杯も平げるに於ては、なるほど宿屋でも驚ろくのは當り前……

□ 振られた物語

田吾作は、晩飯を済ますと、ズラリと宿を出た。其處の陳列棚を

覗き、あちらの店先に立ち寄りながら、迷ひマゴツキ、いつしか吉原の大門へとやつて來た。

『オヤツ、あんだべえ、此處は……』

見ると交番もある。ぞろ／＼人が入つて行くが、多くは男ばかり中はなか／＼賑やかさうだ、スツトントントコ、トントコトントと陽氣に騒いでる太鼓の音も聞え。

皆な入つて行くので、這入つたところで、別に咎められるやうなこともあるまいと、田吾作それでも、小さくなつて入つて行くと、兩側には大きな家ばかり列んで、其處には女の寫眞ばかり、どの家もどの家もズラリと列べてある。

「オヤツ、こりやハア寫真屋ばかりだ、だが、どこを覗いても、女の寫真ばかり、よくもマアかう女ばかりがうつしに來たもんだ』
と、田吾作とある女郎屋の中に入つて、寫真を見てゐると、やつて來たのは牛公だ、

「へい、如何さまで、へいもう此の通り、玉はもう上玉ばかりでございまして、もう今夜はみなひまなものでございますから、御悠くお遊びが出来ますが、エ、旦那、いかがでございませう、一つ縁起を祝つてやつて下さい、エ、旦那……」
と、田吾作の袂をどらへた。

田吾作寫真屋だと思つてゐるので、面喰はざるを得ないぢやない

か、

『あにをするだ』

「へ、へ、へ、さう頑固なことをおつしやらないで、へい、若いのなら若い、年増なら年増お望み通りでございませう……如何なものでございませう。決してもう手前どもは、他様見たいに、高いことは申しません。ねえ旦那、あつさりとへい……へ、へ、へ、』

『乃公女の寫真なんか要らねえ』

「へ、へ、御串戯ばかり、何でございませうか、あなつさまは、東京御見物にお出でになつたのでございませうか』
「ンだ、乃公ハア東京見物に來たもんだア』

「ぢやあなた、尙ほ更らぢやございませんか、東京御見物にお出でになつて、吉原に行くには行つたが、花魁を買はずに歸つたなんてんぢや、お肩身が狭ふございますせエ、旦那、如何でございませうお田舎へのお土産話し、他様のやうに、田舎の方だからと云つて、決してボるやうなことは致しません……ヘイ、もう手前どもは、堅いので通つて居りますから」

「エツ、ぢやアハア此處は吉原かアね」

「へ、へ、へ、旦那はなかく、おとぼけになることがうまいや、エ、旦那、お歸りになつても、お肩身が狭ふございますよ」
 「道理でハア女の寫眞ばかりだと思つた」

「へ、へ、へ、まだあんなことを云つてお在でなさる。エ、旦那、この妓に致しませうか、此の妓に致しませうか、おとなしくて好い妓でございますせ、それとも、もつと年増がおよろしけりや、此の妓でございますね。この妓に致しませう。お望み次第……ヘイ」

牛太郎は田吾作の、手首をとらへて、無理に欄干のところろに連れて来て、寫眞を指して、寫眞と田吾作の顔を、七分三分に眺めてしきりとすゝめる。

牛太郎が、田吾作の顔と、寫眞を七分三分に見比べるのも宜なるかな、寫眞を見て、ニヤ／＼笑つて居る田吾作の眼尻は、正にたしかに疑ひもなく、漸次下がつて行くのであつた。

催して来たなど見てとつた牛太郎は、

「サア、旦那、さう氣を揉ませるもんぢやありませんよ……あつさり遊んで行らつしやい」

「フ、フ、」

田吾作妙な氣になつた。

「極く安値なところで、エ、旦那……」

牛太郎は、もう田吾作の手を、いつかな放さない。また田吾作にしろ、振ぎはなさうともしないのだ。

「だが、乃公東京見物さ行つて、女郎買ひをしたといつちや、嬢どんに濟まねえからのう」

「へ、へ、へ、大丈夫ですよ旦那、何も印がついてるもんぢやあるまいし、さうしてお内儀さんに内證で、怖がりながらお遊びになるから、面白んぢやございませんか」

田吾作生れて四十八歳。未だ曾て女郎買ひなるものをした事が無い。田舎に居たのでは、到底女郎買ひなどの出来よう筈がない。

乃公も死ぬまでに、一度は女郎買ひといふものを、して見たいと思つて居た田吾作、此處ではからず、吉原へと迷ひ込んで、牛太郎につかまつたのが何より幸福、エ、儘よ……と云ふやうな氣になつた。

「一體いくらありや女郎が買へるかアね」

「エ……」

花魁は外に出たが、

「初ちゃんお目出度う」

「アラ、ちつとも目出度かないわよ」

「ゴロちやアねえ」

「まつたくいやになつちまうよ、續いてるんだもの、今日で三晩……」

……

「厭になつちまうねえ」

「おまけにでんしやもの(田舎者)よ」

「さう……」

「誰れがちくしやう」

盛んに田吾作の悪口を仲間と話してゐるが、田吾作はそんなことは知らず、お目出たい顔をしてもう来るか、今来るかと、きたない蒲團から、首を長く出して待つて居る。

ところがだ、花魁はなか／＼来ない。

「一體、何時までがちよつとの間だんべえ」

田吾作もう来るか、今来るかと、相變らず心をそ／＼つて待つて居るが来ない、隣家では、スットンスットン、トロツクトンと、陽氣に騒いで居る。

折から廊下にバアタ、バアタ、バアタ、バアタ草履の音、

「ウフ、、來たなッ」

と、田吾作、堅くなつてると、自分の室にはあらずして、

「どうも濟みません……」

隣室の襖がスウツ……。

「オヤッ、隣室か」

と、思つて居ると、笑ひ聲が起る。話し聲が聞える。

「一體、乃公とこの女郎衆は、何時來るんだべ……」

待つた待つた。田吾作は頭の心が痛くなるほど待つた。それでも
來ない。

草履の音、

「そら來たつ、今度こそ眞實に來たんだべえ」

聞き耳を立て、居ると、だん／＼遠くなつて、近づくどころか、
中庭おいて向ふの室の襖がスウツ……。

「オヤ／＼……一體どうしたんだべ」

夜は更けた。道が賑やかな廓も、寂となつてしまつた。折々バア
タバアタ、草履の音はするなれど、田吾作の室へはなかく／＼來ない
たまさか近づいたから、

「今度こそは……」

と、心を躍らしてると、バアタバアタ通り越して了ふ。

斯うして田吾作寝もやらず、待つこと遂ひに夜明けまで、待ちく

たびれて、眠くはあるが眠れない。眼の心がなんだか痛い。

其のうちにも、もうポツ／＼と起き上つて歸る客があるらしい。

『ハア遂々來なかつた』

と、田吾作獨り語を言ひながら、起き上つて着物を着て歸らうと思つて室を出ると、隣室の室から寢亂れ髪やしごけない姿で、ヒョッコリ出て來たのは田吾作の敵娼、

『オヤツ、お歸りですか……』

もないものだ、

『どうしただ』

『遂ひ眠つてしまつたものですから……』

と、云ふ返事、田吾作こそ宜い面の皮、と云つてかうして、歸りかけて置きながら、また室に戻るといふ譯にも行かない。見す見す三圓あまりの金を、棒に振つて表に出たが、

『またお近いうちに……』

と、立ちながら、女郎の挨拶、

『お近いうちにもねえもんだ。ア、つまんねえあんに行つたんだが分りやアしねえ、三圓あまりの金を出して、草履の音を聞きさ行つたやうなもんだ。女郎買ひといふもなアつまんねえもんだなア』

田吾作獨り語を言ひながら、尋ねもとめて、やつとのことで、稻荷町の宿屋へ戻つて來た。

宿ではやつと門口を開けたところ、飯炊き女中は、田吾作のボンヤリした顔を見て、

『お歸んなさい。お楽しみ筋でしたか』

と、云つた。

『あにが楽しみなことがあるもんでねえ寢ずの番に行つたやうなものだ』

『まさか、オホ、、、』

と、笑つて居る。

田吾作は自分の室に来て見ると、床がボンヤリ待つて居た。

「ア・つまんねえ、あすこで草履の音を聞いているよりも、此室で便

所場の臭ひを嗅いで寢てる方が、どんなにましだつたか知れやしねえ、馬鹿々々しい、三圓あまりの金をふつとばして……』

田吾作は一睡もしなかつたので、床の中に潜り込んだが、しばらくは眠くはあるが、馬鹿々々しくつて眠れなかつたが、間もなくグウツと眠つてしまつた。

眼を覺して、起き上つたのは、もう一時過ぎ、

『昨夜おたのしみさまオホ、、、』

と、女中にひやかされ、田吾作眞面目に、

『あぢよ(どう)して、楽しみなごころか、乃公知らねえで、吉原ちうとこさ行つただ、初めは寫眞屋ばかりだと思つて居たこんななら、

ハア吉原の女郎屋だつただ。登れ登れちうて、あんまりすゝめるだから、登つて三圓あまりもとられただ。そして女郎衆は乃公を寢かして、ちよつとの間待つて、呉んろちうて出て行つたが、何時まで待つても來ねえ、とう／＼今朝まで、一と眠りもしねえで、草履の音ばかりハア聞いて居ただよ。こんな馬鹿げたこつたら、ありやしねえ、乃公が今朝歸る段になつて、隣りの室から出て來ただから、乃公ごうしたと聞いたたら、遂ひ眠つてしまつてたもんだからと吐くだ。ンだちうて、引つ返す譯にも往かねえし、表に出るときまたお近いうちにと吐きやがつたが、死んでもハアまたと行くもんでねえ』

「オヤ／＼、左様でございましたか、それぢやあんまりお楽しみでもございませんでしたね。オホ、妾やまた、お歸りがないのできつとお楽しみ筋にお行でになつて、好い夢でも見てお在でになるんだらうとばかり思つて居ました。」

「夢見る間なんかあるもんでねえ、一眠りもしなかつただから……」

「オホ、……」

女中は大口開いて、笑ひたいのを、やつとオホ、で怵へて居た。やがて其の女中が、帳場の方へ行くと、間もなく、
「マア、そんなことを話したのかへ」

と、云ふのはお内儀の聲。

「馬鹿だねえ、ハ、ハ、ハ、」

「ハ、ハ、ハ、」

「ワハ、ハ、ハ、」

お内儀や女中は、高笑ひをして居たが、田吾作は、何がをかしくて笑つてるのだらう。女といふものは、ちよつとしたことがあつても、大口を開けて笑ふもんだなア……位に思つて居た。朴訥聖に近しだ。

◎ ぶつまたげた鮎代

田吾作は、代議士の口瀬口市を訪ねて、東京見物の案内をさしてやらう云ふ考へ。

田吾作の考へは無邪氣なものさ。

前の日に宿屋の町所を書きつけて置いて貰つたので、それによつて、やつとさで京橋八官町の、大西屋といふ旅館に来て見ると、田吾作の眼には大きなものだと思つて居たが、此家に來て見ると、天で足許にもおつかない。

「大けえ家さ泊つてるだなア。昨夜の女郎屋とごつちが大けえだべ

……女郎屋といやア、思ひ出しても腹が立つわへ」
田吾作獨りでブリ〜。

「へいちよつくら御免なせえ」

「何ですか」

「お前様ン家に、乃公がそこから出てゐる。□瀬□市ちうこくきやア
ぎんが居ますべえか」

「へい、□瀬さんはお泊りになつてゐらつしやいますか……あなた
は……」

どうせ田舎の代議士、若しや親戚のものではあるまいかと思つた
ので、番頭俄かに言葉を改めた。

「ハアさうかね、乃公ア岩山村の田吾作ちうもんだが、□市どんが
ゐたら、さう云つて呉らつせえ」

どん呼はりをするからは、こいつは的きり親戚だらうと思つたの
で、

「へい、ちやうど今お歸りになつたところでございます。ちよつと
お待ちなすつて下さい」

番頭はトン〜二階に登つて行つたが、間もなく降りて來たが、
「お歸りになつたと思つてゐたら、まだお歸りぢやございませんよ
……」

「ハアさかアね、いつ歸りますべえ」

「さア、何しろお忙がしいお體ですから、何時お歸りか分りませぬねえ」

「さうかアね、ンぢや今日は歸るが、何時來たら居べえかのう」

「サア、それも分りませぬねえ」

「ンかな、残念だが仕方がねえ、ぢやまた來て見ますべえ」

田吾作は、留守をつかはれたとは知らないから、大西屋を出ると

三階の欄干のところから、何か怖いものでも見るやうに、

「チエツ、あれだから田舎ッペは困る」

と、代議士の口瀨口市が、見て居たといふことは、田吾作少しも知らない。

選挙の時には、何卒一票を賜はれと、拜み上げる癖に咽喉元過ぎれば暑さを忘れる。

田吾作は、其の日は泉岳寺から増上寺、芝公園を見物して、稻荷町の宿に歸つて來た。

翌朝は早く起きて、

「こんなに早く行きやア大丈夫だべ」

と、態々と京橋の八官町の、大西屋に口瀨代議仕を訪ねて行つたが、

「昨晚お歸りがございませんでした」
と、云ふ挨拶、

「あんだ。昨夜歸らねえ、して見るとあんだな、草履の音でも聞きに行つたかな」

「へエ……」

番頭に分らないのは、敢て不思議なことではない。

田吾作は、誰れも彼れも女郎買ひに行くものは、草履の音を聞いて、夜を明かすものだと思つてゐる。

だから昔から、女郎買ひほど馬鹿なものはないと云はれてゐるのだ……と、獨り合點。

田吾作は銀座通りの見物と出かけたが、あちらに立ち、此方を覗きしてゐるうちに、もうとつくに正午は過ぎた。

「ア、大分腹が減つて来たぞ」

歩いて来たのは魚河岸だ。

見ると屋臺のすし店。うまさうな鮪の鮓。

田吾作は暖簾の中に首を突つ込んで、喰つたも喰つた鮪ばかり二十五喰つた。

「いくらだね」

「へエ二十五でございましたね」

「んだ……」

「エ、ト、一圓二十五錢いただきます」

「エッ……」

田吾作物が云へない。

「一圓二十五錢いただきます」

初めは田吾作、聞き違えぢやないかと思つたが、正しく一圓二十
五錢といふ。

「あんだ、一、一、一、一圓二十五錢……」

眼は四角張つたまふ……

「へい、一つが五錢づつでございますから、五五二五二五の十で

一圓二十五錢になります」

「一つが五錢づつ、しまつた。乃公また一つが精々高くても、一錢
五厘位だらうと思つただ。あんちう高さだ。眼のクリ玉が飛び出ら

ア

「普通のところの鯨だつて、三錢や四錢とるんぢやありませんか、此
處は魚河岸ですよ。魚河岸の鯨と云や、昔から有名なものですせ……」

「いくら有名だつて、魚河岸ちうからにや、魚の上るところだんべえ
それなら尙ほ安くなくちやなんねえでねえか、こらぶつたまげた……」

「へ、へ、……」

「どうだアね。負かんねえかの」
「申戯おつしやつちや困ります」

「ンかなア……」

田吾作今更ら、吐き出す譯にも行かず、是非なく一圓二十五錢の金を拂つて、

「一つが五錢づゝたアぶつたまげた」

鮪をうらめし氣に見やりながら、屋臺を出たが、折角うまかつたのも、値段をきいた時に、びつくりして忘れてしまつた。

「一つ五錢、ぶつたまげたな、ハテナ、一つ五錢の鮪は、どんな味がしたかな……」

思ひ出さうとしても、どうしても思ひ出すことが出来ない。

「ア、吉原ぢや三圓あまり只でとられるし、今日はまた飛んでもね

え、一圓五十錢もとられたが、お蔭で腹は一杯になつた。吉原に比べると、今日の方がまだ宜えや……。ハアして見ると、色氣よりかも、食ひ氣の方がまだ宜えや……」

諦めては見たものゝ、それでも考へると、惜しくてたまらない。怨めし氣に、屋臺を振りかへりながら、張も力もない。がつかりした顔をして、トボ〜と歩いた。

「ア、こんなことなら、悪く云はれても、笑はれても、腹ア減らして歸つて、晩飯をうんと喰ふ方がよかつた。

残念がること、残念がること……

三越白木閉店論

田吾作は、魚河岸の鮓代におどろいて、悄氣ながら歩いて來ると何にぶつたまげたか、

「アツ……」

と、叫んだ。

「コレハア上野の動物に居つた、ライオンちう獅子と同じだが、あんだつてこんなところさ置いとくだべ、此いつア上野の動物園のと違つて黒光りに光つてら、おとなしくしてやがるが、よく馴らしたもんだなア……」

田吾作は、三越のライオンを見て、生きてるものだと、思つて居る。

「アツ、不思議だぞ、此のライオン獅子は、ハアちつとも動かねえアツあつちにも居るが、これだけぞろ／＼人が通つてるのに、何ともしねえのかなア」

「よく／＼見て居たが」

「あんの事だい、どうもしもしなけりや動きもしねえのは當り前だ造りもんだ、ハア……あんだい」

田吾作はじめて、造りものだといふことが分つた。

「だが、一體此處はハアあんだべえ、若え美しい女たちがぞろ／＼」

入つて行つたり、出て來たりするが、オヤ、自動車で來て、入つて行くぞ、ありや夫婦だつて、どうだいあの着物は、まるで眼が眩むやうだ。なるほどあすこになんだかかざつてあるぞ。ちよつくら駐在所さ聞いて見べえ』

田吾作は、傍らの交番にやつて來て、

『ハアちよつくらお訊ね申しますが』

『ア、何だね』

『此處はハア、素晴らしい立派な家だが、一體ハア何をするうちかアね』

『ハ、、、此の家かね、此の家は、東京一番どころか、東洋一と

云はれた、三越呉服店だ』

『アッ違えねえ、ンぢや棕次郎が、菓子でも何でも喰ひ放題と云つた。三越ちや呉服屋は此家かアね』

『日本橋に行くとき白木屋と云ふ、これまた大きな呉服屋がある』

巡查は親切に、訊かね白木屋のことまで教へて呉れる、別に白木屋から、贈賄した譯でもあるまいが、

『ンさうかアね、誰れでも入つてよかつべえか』

『ア、宜いとも宜いとも、一人でも餘計入つて呉れるのを、却つて喜んでゐるんぢや』

『ハアさうかアね、ンぢや乃公もハア入つて見べえ、どうもハア有

り難ふがした』

田吾作は、警官に禮を述べて、中に入ると、下足番が下足を預かつて、札を渡す。

『ハア、丁寧だなア、まるで芝居見てえだが、中錢をとるんぢやねえかな』

田吾作心配だ。

田吾作はグル／＼廻つて見て、一つとして眼をおごろかさないものはない。

『どうもはアぶつたまげたな此處さ嬢ごんやお芋を連れて来て、何でも欲しいもんを買ふてやるちうたらハアごんなに喜ぶべえ……』

二階三階と見廻つてゐると、半襟が美しく列べてあるところに出た。

『ねえちよいと、これがよかなくつて……』

『さうねえ、ぢみだわ……』

『さう……』

『ぢや此の方は……』

『さうねえ、もつとはでなのが宜いわ』

若い娘もあれば、母娘連れもある、夫婦連れで亭主が嬰兒を抱いてゐると、嬢はあれが好いの、これが好いのと、半襟の柄を見立てるのに一生懸命亭主や子供のことは忘れてるらしい。

『何ですかね、あなた。もつとよく抱いてらつしやいよ。そんな抱き方をしちや窮屈ぢやなくつて、ああじやまつけた。あなた、もつとそつち行らつしやいよ。ボンヤリしてゐらつしやらないでサ……』

田吾作これを見て、

「オヤ／＼、髻を生やした。立派な旦那様が、洋服を着て嬰兒を抱いて、おまけに夫人の提げ袋を持つて、叱られてるぞ、ハア東京ちうどこに来ると、夫人の方が、旦那様より位が一段低いと見える。乃公が方ぢや、他所に行くときか何かでも、嬢が子供を背負つたり抱いたりして、品物でも何でも、嬢が持つたが、東京はさうでねえ

らしい。オヤ／＼、あすこにも居る、アツ向ふにも居る。あの人は背負つてゐるが、洋服を着て髻を生やして、子供を背負つてゐるなア見つたくねえもんだなア、……ンだが娘のお芋に、こんな立派なものを買つて行つてやつたら、よろこぶべえがなア、高えだべなア』

田吾作 キヨロ／＼して居ると、巡察の奴が、田吾作をあやしいどでも見たものか、しきりと眼をつけて居る。

田吾作の方でも、あまり自分の方ばかり見てゐるのでさうと察した。

ヒヨイと前を見ると、立派な着物を着た、どこかの奥さんといふ

やうな女が、半襟を二つヒヨイとコートの下にかくして、あたり見廻し知らぬ面、

「馬鹿だな、濟まねえが、乃公なんか田舎もので、こんな汚ねえ風はしてるだが、何一つだつて、盗んだりゴマかしたりするんぢやねえ、大丈夫な乃公の方ばかり見てゐて、肝腎の盗賊は分んねえ、だが東京ちうところは、物騒な人間ばかりそろつたところだなアあんな立派な人があんなことをするだからなア……」

田吾作は呆れながら、其處から出て、

「ハテナ、棕次郎が云つた、菓子喰ひ放題の處はごこたんべえ……」

と、あつちこつちとうろついたが、一向、そんなところも見當らない。

魚河岸で、鮪の鮓を二十五も喰つて、まだ其の上に、只で喰へる菓子があつたら、詰め込まうと鶉の目鷹の目。

折りから、田吾作はゴツンと額を打ち當てた。

「アいてツ……氣をつけて歩くもんだよ」

と云つたが人は居ない、見ると、前には自分と同じやうなものが立つてゐる。

「オヤツ、乃公によく似てるな」

と、よくく見れば、似てゐる筈だ。前にはあかるいから、行ける

ものだと思つてゐたところが、其處は大きな鏡で、立つて居るのは田吾作それ自身だつたのだ。

「アツ、あんだい、鏡か……アツ痛えツ」

と、見ると額には、ニヨキ〜と大きな瘤の野郎が頭を擡げた。

入るには入つただ、今度は出口が分らない。

あつちにウロ〜、此方にウロ〜、日の暮れ方にやつこのこと
で出口を見つけて、表に出ると、

「ヤレ〜……」

田吾作 ホツと一息、

「何にしても大したもんだが、お上はあんだつてこんな店をやらし

てくだべ、あんな贅澤な呉服屋なんかいあるから、みんなが美しい着物を着たがるだ、見ろ、あすこの中さ入つてるもんで、乃公見てえな、まづい着物を着てるもなア一人もありやしねえ、みんな、ピカ〜な眼の眩むやうな着物ばかり着てるだ。百圓も二百圓もかけて着物を着るたアつまんねえ話だ。自動車で買ひに来る奴もあるし、嬢の買物をするのに、亭主野郎が、餓鬼を背負つたり、抱いたりして、お供をしてるたア何ちう態だ。あれで何だぞ、どうせ官員さんか會社に出てゐる人だべが、月給のとれるのを、ハア嬢はつかふべえつかふべえと待つてるに違えねえ、フン、好え面の皮でねえか、亭主野郎が、一生懸命に働らいてとつた金を、三越だの白木屋だの

ちうて、ペロリと使ふてしまふ。何も寒さ暑さを凌ぐ着物さへ着てりや、それで宜え譯のものでねえが、華族様や金満家の奴等が使ふ分にや宜えが、金もねえ奴が、そんな奴等の真似をしたがる。買へねえと、先刻の女見てえに、どうせどつかの奥さんとも云はれるもんだべが、ちよろまかしたりなんかするだ……華族様や金満家だつてさうでねえか、手前たちがそんな贅澤な真似をする金を、日本國中の貧乏人にめぐんでやつて見ろ、どんなに助かるか知れやしねえ。金ピカの着物どころか、ボロ着物一枚だつて、自由に着れねえで、寒空にブルブルと慄へてるものが、いくらあるか知れやしねえ、あんでも東京ちや、ちよいと、騒動がもち上つて、焼き討ちなんかや

らかすが、東京の奴等も向ふ先きの分んねえ馬鹿ばかりだな、そんな時に、あんだつてあんな贅澤な、だんく世の中の奴等を、贅澤にしてゆく、店を、第一番に焼き討ちしねんだべ、分んねえにもほごがあらア、んでなきやあんな店は止めさしつちまつて、あの大きな家なんか、貧乏人の子供の學校にするか、ンでなきや寺にでもして、あんな盗みをしたりなんかしねえやうな、人間をこしれえるが宜えや、あれちやまるで、サア盗みなせえと云はねえばかりでねえか、あんど云ふても、三越だ、白木屋だちうて世の中の奴を、だんく贅澤にして、不景氣にして行くどんでもねえ奴とも氣がつかねえで、あんな店があるのを、大きな面して威張つてやがるから、乃

公腹が立つてなんねえ、田舎つぺ田舎つぺと、乃公たちを間拔かど
 んまのやうに云ふが、東京の奴等こそ、よつほど、間拔けでねえか
 どんまでねえか、あんにしても、白木屋だの三越だのちうやうなど
 はうもねえ贅澤な店は、ドシ／＼閉店はしてしまふが宜えだ。さう
 すりや可愛想に、髻を生して、洋服を着た亭主野郎が、餓鬼を背負
 はされるやうなものもなくなる譯だ。乃公あの大けえ家を見ると胸
 糞が悪くて、業腹で業腹でなんねえだ』
 と、田吾作聳え立つた三越の大建築を振りかへつて、ガアツバツと
 痰を吐いた。

繩暖簾の一

東京見物に来て、東京の居酒屋に、入つて見なかつたと云つたの
 では、村に歸つて肩身が狭いと、田吾作は日暮れ近頃、飛び込ん
 だのは、南千住の繩暖簾。
 中に入つて見ると、じめじめした土間に、長い臺が置いてあつて
 其の兩側に、それと同じ長さの、汚れ光りに光つてゐる腰かけが列
 べてある。

『入らつしやい』

禿頭病で、頭はツルリと禿げた亭主は、田吾作を迎へたが、全部

悉く、ツルリとなつて居るのなら、まだ見られないこともないが何しろところ／＼に、ポツリ／＼と、一固りづゝ、ポツ／＼と毛がのこつてゐるので、其の格好といつたらない。

そればかりぢやない、丁寧にも、頭がこれで、目腐れで、鼻が何時も空を仰いで我が大日本帝國の、空中殉難者の多いのを嘆いてゐる。

『何にいたしませう。日本酒ですか、それともブランカウイスキーにしませうか』

『あんだい、ハアそんブランカウイスキーちうなア』

『へい、西洋のお酒でございます』

『なるほど、西洋の酒か、そいつア飲まなくちやなんねえ、なア村でも西洋の酒を飲んだものは、フンはトかりながら、ボン／＼ながら、此の田吾作ばかりだ。んぢやそんブランカウイスキーをもらふべえ』

『どつちに致しませう』

『だから云つてゐるでねえか、そんブランカウイスキーにして呉んろと……』

『へエ、ブランとウイスキーは、別でございますが』

『ンか、ンぢやブランちうのを貰ふべえ』

虎ちゃんは、小さなコップを持つて来て、ボンと置いて、それに

なみく／＼とついだ。

「ハア、これがハア何かね。プランちう西洋の酒かアね」

田吾作一口飲んで見たが、ツンときつく来るので、變テコな顔をして居る。

「ハア乃公たちにや、飲みつけねえ故か、やつばし日本の酒の方が好えやうだ……」

「左様でございませぬ、お飲みつけない方だと、日本酒の方がよろしうございます」

田吾作、今度は日本酒を八勺ばかり入る、つまり一合入りといふコップに注がせて、チビリ／＼とやつてゐると、

「ハア、今日は乃公が一番だらう」

背負つて来た空の籠を、ボンと入口に投げ出して入つて来たのは一人の屑屋、

「ハ、、、まつたくだ」

禿ちやんが云ふと、

「オヤ／＼、馬鹿に早いぢやありませんか」

と、クチャ／＼の、ちいれつ毛の平たい鼻は廣い顔の面積の、約五分の一を占領してくつゝいて居る。鼻の株の大きいところは、如何にも大膽で、人を茶化して居るやうな面がまへ。

それでまだ四十二三といふのに前の上歯が三本ばかりひっこ抜け

て居て、顎が短かくて頬骨が突出して居て、眼が細くて、耳がツンと立つて居る。火鉢の側に座つてゐたお内儀もかう云つた。

先づどこから見ても、夫婦ともかうも揃つて不揃ひな面をして居るものか、造物の神の悪戯も、此處まで行けば、いやもう澤山。

此の屑屋は何時にも來てゐて、何を飲むといふことは、禿ちやんや縮れの方でよく分つてゐるので、廣太郎の前に、コップをコンと置いて、大きな壺から、酒と焼酎と割つた奴を注いでやつた。

屑屋は、あだかも咽喉を渴かして居たものが、水かサイターでも飲むやうに、あはて、口を持つて行かうとしたか、何を思つたか、急に口を途中でとめて、

『オヤツ、今日は馬鹿に安盛りだな』

かう云つて、さもうまさうに、もう咽喉から、迎ひの手を出してグツ／＼と唸らせながら、亭主とおかみの顔をじろり眺めた。

禿ちやんは、汚ひ拭布だか雑布だか分らないやうな布で手を拭きながら、

『さうだ、今日は景氣よく、お前さんがいの一番に來て呉んなすつたから、大負けなんだ』
と、云つた。

『んだらうとも、だがなア、黄金の花の中高とならんまでとか云ふが、なるほどこれぢや、黄金とまちや行かなくつたつて、中高にな

つてらア……オットット、かう安く注がれた日にや、口の方からお出迎いだ」

屑屋は一息に半分ばかりも、口をつけてキユキユキユツとやつていかにもうまいと云ふやうに、ビチャリと一つ舌皺を打つた。

「お前さんは、なか／＼豪いことを知つてゐなさるね」

禿ちやんは、ズウ／＼氣持の悪い脂の音のする煙管で、煙草を吸ひながらかう聞いた。

「今いつたことかね」

廣太郎はかう云つて、眞つ四角な、大きな面の中央、尤も少しでも横にあつては臺なしお化けだ……が頑定に、叩き付けられたやう

な鼻の尖を、ビク／＼と動かしたが、其の格好は、あだかも大鯰が頭をビク／＼動かしたやうだ。

さうして残つた半分の酒を、グツと飲み干して、ポンと音をさして置いた。

禿の亭主は、狼狽て、吸ひ殻を叩き出して、又前の大壺を持つて来て、廣太郎が其處に置いたコップになみ／＼と注いだ。

そして、

「どうして、豪いことを知つて居なさるへツ／＼」

屑屋は田吾作の顔ジロ／＼見ながら、鮪の骨とゴツタに煮た太根を、ムシ／＼喰つて居たが、やがて口の端を、頑丈な、熊のや

うな手でちよいと拭いた。

『ハ、今でこそ、乃公もかうやつて、屑屋なんかしてるんだがこれでもなア、元からの屑屋ぢやねえんだから……』

コップに口を持って行つて、キユツとやつた。

『ほんとに、さうでせうね、これで何ですよ。どんなことをしてるなすつても、元からの何かどうかといふことは、直きに分りますよねえ、争はれないもので……』

おかみはかう云つて蓮の煮びを、ちよいと摘んで、口の中に叩き込んだが、それを見て居た屑屋は、別にいやしい奴だとも思はない、りや、きたないことをする嬖だとも思はない、もうそんなことは馴

れて居るから平氣なものだ。

尤も縄暖簾を潜るもので、そんなことを云つてると、反對に笑はれなくちやならない。

『まつたくだ。どうもねえ、私もお前さんを、初めからさう思つて居たよ。元はなんでも何だとねえ……』

かう云つた亭主が、今度は蓮の煮びを手つかみで皿に盛りながら半分になつたやつを口の中に入れて、拇指と人指の頭についた汁をちよいとなめて、又平氣で皿に盛つて居る。

此方で田吾作、

『オヤ、きたねえことをしてるなア』

と、思つて、見て見ぬ振をして居る。

「あの位なこたア何でもねこえつたな、もつとく豪えことを知つてらア」

屑屋は、今度は初めてのやうに、残りを一遍に飲んでしまはないで、半分ばかり飲んで、はげちよろけた箸で、鮪の骨をはさんでしやぶつた。

「さうでげせうとも……」

禿は鍋の蓮を、あらかた血に盛つてそれを中の見えない、不透明になつた硝子のはまつた中に列べた。

「なア旦那……」

屑屋はかう云つて、残りの酒をグットやつたが、もうそろく酔が廻つて来た。

何しろ空きつ腹のところへ、強い焼酎の中に、いくら水を割つてあるとは云へ、防腐剤の入つた。ツンと来る酒を割つたのを、二合ばかりやつたのだから、眼の玉が、

「屑い〜」

と、路次に入つて、其處らを見廻したり、氣の利いた家の、塵芥箱に眼をつけたりするときはのやうにキヨロつかないで、おさまりかへつて坐つて来た。

ボンとコップを置くど、

『何です、注ぎますか』

禿ちやんは、そんなに飲まして、勘定を持つてるかと、些か以て心配顔。

『何をッ……』

『ハッハッハッお酒を……』

『オイ〜心配するなへ、五杯や十杯飲んだつて、勘定がねえから濟まねえがなんて云ふやうな乃公ぢやねえ、心配しねえで注いでくんな』

『ハッハッハッ、なにね、そんなことを心配するんぢやねえが、あんまりやつて酔つばらつちやと思つてね』

『ハ、酒を飲みやア酔ふのが當り前、酒を飲んで酔はねえ位なら、初めから高へ錢を拂つて飲むこたねえや……心配するなつてことよ』

一度下に置いたコップを取つて。また破るほどコッソンを置いた。置いたといふより、叩きつけたのだ。

『なアにね、決して何です。勘定のどうのかうのつてこたアねえが、これであんまり酔つばらつて、失策でもなさると不可ねえと思ひやしてね、これもお馴染だから云ふのでサア、でねえ通り一遍のお客なら、いくら飲んで酔つばらつて、そんな失策をやらかしたかつて、私どもの知つたこつちやねえ、私どもでは、一杯でも餘計

飲んで下さりや、それだけいくらでも儲かるんですからね、ヘッヘッヘッ」

「なるほど、分つてらア、豪えな、これだからなア、なアをやちアツハ、、をやちは失敬だが、そりや途中なんだせ、居酒屋はいくらもあらアな、だが、そんな家を通り越して、お前の家にやつて来るんだ、なアおッ嬢……イヤこいつも不可ねえ……おかみさんだ……」

「ヘッヘッヘッ、ですからね、矢張り私どもでも、大切なお馴染のお客さんだと思つて、遂に憎まれ口も利くんですよ」

と、云ひながら、禿の亭主は、屑屋が叩きつけたコップに酒を注い

だ。

すると火鉢の横に居たおかみも。

「さうですども、私どもでは、大切なお客さんですもの、あんまり酔つて、途中で轉んだりなんかして、怪我でもなすつちや大變と思ふもんですからね……」

と、云つた。

屑屋は、ギクツと下げてゐた顔を上げて、

「分つた分つた。イヤ大きにさうだ。そこだテなア飲みつけの有り難味は……」

と、云ひながら、コップをグツと睨んでゐたが、

「オイ、お馴染甲斐は好いが、こりやアなんだい、こりやア……え、オイ、濟まねえが酒飲みなんか、お前の知ってるやうに、至つて意地のきたねえもんだ、初めのやうに一つ中高にするやうに注いでくんない」

禿ちやんは、ちよつと顔をしかめて、

「オヤ、中高になつてませんか、近頃はね、もうそら陽氣がこんなで、木の芽だちになつて来たもんだから、眼が霞むんで……なるほど、いやコイツは濟まなかつた御免なさい……」

と、注ぎ足した。

「サアどうです、これなら中高でげせう」

「さうださうだ、オットツト、これでなくちやうまくねえ。かうやつてね、口の方からお出迎ひをやらかすやうでなきア……」

と、溢れる酒をスル／＼とやつた。

もう分るまいと、少しづつ胡魔化すつもりだつた。ところが事露顯に及んで、眼が悪いでゴマ化したか、厭な面をして煙草を吸ひながら、禿ちやんは煤けた八角時計を見上げた。

「時にやぢぢやねる旦那……」

「へエ……」

「百年は何日になるか知ってるかね」

屑屋は、鮪の骨を挟んちや落し、落しては挟みしながらかう云つ

た。

「さうですねえ、一年が三百六十五日でげすから………コウツと…

…」

「ちよつと分るめえ」

やつと挟んで、口の側まで持つて来てかう云つた拍子に、骨は箸から抜けて落ちた、

それをあはて、とらうとしたが、もう間に合はないで、土間にボトン。

「チエツ……」

と、屑屋は舌打して、落ちた骨を怨めし氣にながめやつて居ると、

隅つこに寝て居た、汚れこけた、脚の短かい犬が、ノソノソやつて来て、いきなり咬へて、又元のところに持つて行つて、ワリワリ音をさして食ひはじめた。それでも徳太郎は、まだ未練さうに、犬の方を眺めた。

「さうですね、一年は三百六十五日と分つて居ても、ちよつと、百年となると、勘定がやつつこしいね」

と、亭主の禿ちやんは云つた。

「さうだらう。だが、乃公なんか、そんなこと位はちやんと分るんだ」

「へエ………幾日になりますね」

「百年か、百年は三萬六千日だ」

「へエ……さうですかね、いやなか〜お前さんは感心な人だねえ……」

「さうだらう。だから乃公だつて、元からの屑屋ぢやねえつてんだ〜」

「さうでせうとも……」

屑屋の眼は、もう大分とろんこになつて來た。

「オイをやぢ、注いで呉んな」

をやぢと云つては、言ひ直して居たのだが、もうをやぢと平氣で云ふ。

禿ちやんは、又一ぱい注いだ。

ところへ、繩暖簾を潜つて入つて來たのは、菊石面の五十前後の男、これも同じ屑買ひ仲間と見えて、空の籠の中に、秤を入れたやつを土間の隅に置いて、

「やッ、徳さん今日はどうしたんだい」

と、前の屑屋に聲をかけた。

前の屑屋はとろんこの眼で、其の男を見やつて、いかにも悔つたやうな口調で、

「アッハ、、源さんか、乃公なんかなア、ヘッヘッヘッ何時までも愚圖々々しちや居ねえんだ。馬鹿々々しい、日暮れまぐれになつ

て、問屋に行つて、喧嘩腰になつて、買つて貰つて、それからやつと一杯なんて、そんなマゴくしたこたア厭へだからな』

此奴は大分きこしめしてるなと思つたので、菊石の源さんは、

「ハ、、、さうか、いや豪えもんだなア』

と云ひながら、前の屑屋の徳さんから少しはなれた、向ひ側に陣を張つた。

「コレハお入でなさい』

禿ちやんはコップを源さんの前に持つて來てかう云つた。

「オウをやぢ、もう一杯呉んな』

徳さんは、景氣よくコップをコッソン……。

「なか〜飲けますね、ハッハッハッ』

「ハ、、、』

菊石の源さんは大きく笑つた。源さんがかうして笑ふ時は、面中の菊石が伸縮するのだ。

「やあれ注ぎ候へ注ぎ候へ、黄金の色の中高とならんまで、やれ注ぎ候へ注ぎ候へ、百年三萬六千日、日に三杯を傾むくるも、十萬杯に過ぎず、安兵衛まあだ飲み足らぬつてなアツハ、、、』

徳さんは、元からの屑屋ぢやないと、博識面をして居たが、安兵衛婿入りの浪花節の一節の聞き覚えだつたのだ。

「ハ、、、先刻のは浪花節の文句でしたねごうもあんまり豪いこと

だと思つたら……』

禿ちやんがかう云ふと、徳さんは、ヤツしまつた、ボロを出した
なとも思はない。

「さうさ……呑んべ安兵衛グツ安兵衛つてな、アツハ、、乃公犬
正安兵衛だ」

徳さんは平氣だ。

「安兵衛か……」

菊石の源さんは、鮪の骨と大根を、ピチャ〜やつては、コツブ
の酒を、一口一口味みるやうに飲みながらかう云つた。

どころへ、土方風の男が三人入つて來たが、これは知らないもの

と見えて、徳さんにも源さんにも言葉をかけなかつた。

「入らつしやい。お肴は何にしませう」

禿ちやんは、三人の御意を伺つた。

「さうよな、オイ兄弟、何にする、一體」

「んだな、何があるんだい、刺魚はねえのか」

「エ、お生憎でございまして」

徳さんは、コツブの酒をグイとやつて、

「ウエツ、大きなことを云つてやがらア、其の癖見たこともねえ癖
に……」

と獨語を云つたが、三人には聞えなかつた。

「オイ何にするね」

と、一人の男が云ふと、

「なんでも好いちやねえか、何があるんだい」

禿ちやんは禿をツルリと一つ撫で、

「さうですね、鮪の骨と大根と煮たのと、蓮に、それからおしいし
酢章魚位なものです……」

「不景氣だなア」

と一人が云ふと、一人が、

「宜いちやねえか、鮪の骨と本根と煮たやつで……」

「ウム……」

と二人も云つて腰を下した。

「鮪と大根の煮べを上げますか」

「ア、……」

「フン、それ見ろ、此家に入るもので、刺肉だなんて柄ぢやねえや
其の邊が落ちなんだつてことよ」

徳さんは、かう獨りで云つたが、矢張り三人には聞えなかつた。

徳さんは、もう以前のやうにガブ／＼はやれない。チビリン／＼や
つて居る。

菊石の源さんは、初めからチビリン／＼で、今やつと二杯目にかゝ
つて居るところだ。

「時になんたせ徳さん」

と菊石の源さんは、徳さんに話しかけた。

徳さんは、もう半分眠つてるやうな眼を源さんの方に向けて、

「ウム……」

と返辭をしてしばたゝいた。

「事に依ると、お互ひにかうして、好きな酒も、太平樂を云つて飲めなくなるせ」

と云つた。

徳さんは、怪しからぬといふやうな顔で、

「どうして、どうして好きな酒が飲めなくなるんだい、ウム、何

で太平樂を云ふて飲めなくなるんだ。筧棒奴、酒を飲むのに、小さくなつて飲んで、何處に味があるんだい、エ、オイ源さん……」

徳さんは、源さんに喰つてかゝつた。

これが素面のものなら、ムツとするのだが、其處はまたお互ひに酔つ拂ひ同志。

「何だつて、お互ひに筧棒に酒が高くなつたら、さうく飲めなからうぢやねえか」

「なんだつて、酒が高くなる、筧棒奴、今日日でも好い加減に高えところに持つて来て、まだ高くされてたまるもんか。そんな……そんなことをしやがつて見ろ、酒屋なんか、片ツ端から焼き打ちだ」

徳さんは、其處らに唾やら、喰つたもの、屑を飛ばして云つた。

「ハ、ハ、ハ、焼き打ちか……」

源さんは、コップの底にのこつて居る酒を透かして見てかう云つた。

『どう云ふ譯で高くなるんだい』

「なんでも、米が足りないんだと、ところが、酒を造るのに米を潰すのが何でも大變なもんだつてぢやねえか、だからよ、いくらならいくら以上は、酒を造ることはならねえと云ふやうにお上で定めるんだと、さあさうなると、酒が少なくなるから、今の倍もするやうにならうといふ話だ。旦那、一杯注いで呉んな」

源さんは底にのこつて居たのを飲み干してボンと置いた。
向ふで禿ちやんの亭主も聞いて居たのが、

「なんだか、そんなことを云つてる學者があるつて新聞に出てるといふことでしたね」

と云ひながら、コップに酒を注いで、

『尤もこれでなんでせうよ、酒に潰す米と來たら、大したもんでせうつてね』

かう云ひながら、禿ちやんは帳場の方へ行つた。

徳さんは、コップに額を押しつけるほど、グツタリと首を垂れて居たが、此の時頭を擡げて、

「なんだつて、何處の學者だ、そんなことを吐しやがるなア……」
と云つた。

「ハ、ハ、ハ、ごこの學者だか知らねえが、さうなつたらよ、お互ひにかうして此處で、毎晩方落ち合つて、大きなことを云つて飲むといふことも出来めえよ」

「フン、べらばうめ、そんなことにでもして見ろ、乃公が承知しねえ、なア、乃公だつて、今はかうして屑屋に成り下つてはゐるが、これでもしんじよの二つや三つは叩きつぶして來た人間だ。フン憚りながらボン／＼ながらだ。第一よ……」
と、徳さんは語を切つて、コップの酒をキユツとやつた。

「第一よ……こちとら見てえなものが、何よりも樂しみにして居る酒を、やれいくらよりか造ることは出来ねえとか、酒の値段をあげろなんて云はねえで、自働車をフツ飛ばしたりなんかしてる奴に、ウンと税金をかけてさ、其の方の金で、どん／＼外國米でも何でも好いから買ひ込んだら宜いちやねえか」
源さんも、

「んだなア」

と賛意を表した。

徳さんは得意になつて、

「んだともさ、見なあいつらが、自働車の上に踏んぞりかへつて、

家に歸ると、旦那様だの御前様だのと云はれて、やア刺肉は喰ひ飽きたの、肉はいやだの、西洋料理はどうかの吐かしやがつてそいつ等の嬢だの娘だのを見な、矢張り自動車飛ばして、やア三越だの白木屋だのと……大體、三越だの、白木屋だの、あんなものが要らねえものなんだ。なんだつていつかの暴動の時に、あんな家を焼き打ちしなかつたと、乃公ア口惜しくつて堪んねえ……ちよつとした家の勝手に行つて見な、屑屋入るべからずなんて、屑屋だと云ふと、泥棒か何かだと思つてやがる、憚りながらボン／＼ながらだ、屑屋はしてゐても、人のものと我が物位の差別位は知つてらなア源さん、さうぢやねえか」

「んだともんだとも」

源さんは三杯目の酒を一口やつてかう云つた。

「フン大きな面をしやがつて、屑屋なんかよりかも、手前たちの方がよつほど危ねえや、手前たちに泥棒根性があるから、屑屋だつて泥棒に見えるんだ。なアオイ、樽の中に石を詰めて、それを賣つて金持になつて、而かもお前、華族様になつた奴が居る世の中だ、何が豪えんだい。自動車をふツ飛ばして居るやうな奴に限つて、碌でもねえ奴ばかりなんだ。フン、大けえ面をしやがつたつて、みんな泥棒ぢやねえか、大泥棒の大泥々だ」

徳さんの氣焰當るべからずだ。

「さうださうだ、まつたくだ」

源さんは合槌を打つた。

「さうだらう、乃公の云ふことが違つてゐるか、え、源さん、ちつとも違やしめえ」

「まつたくだとも、ちつとも違やしねえ」

「さうだらう、なアをやち、さうだい、乃公の云ふことが違つてゐるか」

禿ちやんはニコ／＼しながら、

「違はねえ、まつたくだ」

と云つた。

「さうだらう、違ふもんか、そんな奴には、好き勝手な真似をさして置きやがつて、乃公たち見てえな、其の日暮しのものが、何よりも、樂しみにしてる酒を、やれいくらより造るこたア出来ねえなんて云つて、酒の値段を上げるたアなんだい。それよりかも、美しい衣服や、贅澤な品物なんかは、ごん／＼税金をかけたら好いちやねえか……」

「ンだとも……だが其の學者の云ふにや、酒なんかは身體に毒にはなつても、藥にやなんねえ、そんなものにうんと米を潰すなア勿體ねえ、さうすりや酒が高くなるから、だん／＼飲まなくなるだらうといふんだとさ」

源さんはかう云つて、大きな大根をガクリと喰つた。

『なんだつて、酒なんか身體に毒になる、フン何が身體に毒だい、こんなに薬になるもんがあるけえ、なア、あゝ草臥れたと思つてるところに、一杯キエーツとやつて見ねえな、まるで腹の底まで泌み渡つて、急に生き返つた様な氣持だな、氣がクサク／＼する時でも、此處に飛び込んで、ばい一やると、けろりと忘れてしまふんだ。乃公とても酒がなくなちや、一日だつて生きちやゐられねえ、畜生ツ、そんなことをして見やがれ、乃公酒が高くなつて飲めねえやうになつたら、ほんとうに、泥棒してでも飲むんだ』

徳さん、本性をあらはした。

「ハ、ハ、ハ、恐ろしい勢ひだな」

源さんは大きな口を開けて笑つた。

「當り前よ」

かう云つて徳さんは、又ガツクリと頭を下げたが、口からはだいたしく、だら／＼と涎を垂らしてゐる。

後から入つて來た三人は、頻りと何か仕事のことを話しながら、コップ酒を呷つて居た。

すると徳さんは、思ひ出したやうに、夢からでも覺めたやうに、グープと一つやつて、

「オツ、をやぢ、たのむせ……」

コップを掴んで、三寸ばかり持ち上げたが、手首がグニヤリさしてポンと置いた。

「へエ、まだ飲けますかへ」

禿ちやんは、オイソレと注がうとしない。

「大丈夫だつてことよ」

「もう好いでせう、ごうです、あとは明日のお楽しみとしたら……」
すると源さんも横から、

「オイ、徳さん、好い加減にしといたが好いよ、悪いこたア云はねえ、酒といふやつア、つぶ六に酔つ拂らふよりも、ホロリと來た位が、一等氣持の好いもんだ、それによ、そんなに酔つて歸つて見

な、またやかましいせ……」

と云ふと、徳さんは、

「何がやかましいんだい」

と訊き返した。

「何がつて、お嬢がよ」

「何お嬢が、お嬢がどうやかましいんだい」

「どうやかましいつて、毎晩やらかしてゐるぢやねえか」

「串戯云ふない、好きな酒を飲んだ位で、グツ／＼嬢に云はれて、おたまりこぼしがあるけえ、グツ／＼吐しや、嬢でも何でも叩き出して丁はアな、なア嬢の新らしいのと、疊の新らしいなア、氣持の

宜いもんだつて、昔から云つてあらア……オツ、何でも關アこたねえ、注いで呉んな呉んな」

「ハ、此處ぢや何時でも鼻息が荒えが、歸るとこれでおツ嬢に頭が上らねえんだからな」

源さんは、獨語のやうに云つたが、徳さんには聞えなかつたか、黙つて頭をフタクさして居た。

「もう随分お飲んなすつたから、宜いでせう……え、飲りますか」
禿ちやんは、大きな嬢に手をかけてかう云つた。

「飲るとも、注いだ注いだ。心配することねえ、勘定を待つて呉れた云やしねえ」

「ヘツヘツヘツそんなこたア大丈夫ですがね」

禿ちやんは又一はい注いでやつた。

けれども徳さんは、もう初めのやうな元氣はない、少しづゝ飲んで居る。飲んで居るといふよりか、舐めて居るんだ。

「誰れだ誰れだ、こんなところに籠をおつぱり出して今に盗まれつちまふせ。」

と云ひながら。入つて来た一人の男。

田吾作は、

「オヤ又来たぞ」

と思つて其の方を見やつた。

◆繩暖簾の二

これも同じ屑屋仲間の、片目の鐵さんだ。

「ヤア……」

と源さんは、鐵さんの顔見てかう云つた。

鐵さんは、ちやうど源さんと向ひ合せに腰かけて、

「早えゝなア……オウ一杯呉んねえか」

「ヘイ、入らつしやい」

禿ちやんは、直ぐコップを持つて來て置いて、それに並々とついでだ。

「どうだい、まるで屑屋居酒屋見てえだな」

土方の一人はかう云つた。

「まつたくだ」

と二人が口を合して云つた。

「お前のか、表の籠は」

鐵さんは源さんにかう訊いた。

源さんは、土間の隅を見て、

「インヤ、乃公のはあすこにあらア、徳さんのだ」

「さうか、オイノ、徳さん、あんなところに籠を置いといて、盗ま
れつちまふせ」

鐵さんがかう云ふと、コツブには半分ばかり酒を残し、首垂れて涎ばかり垂らして居た徳さんは、此の時ヒヨイと顔を上げて、

「ヤア……鐵さんか、何をグヅグヅして居たんだい、矢ッ張り何だ、日暮れ暮れに問屋に行つて、喧嘩腰の方だな、アツハ、ハ、ハ、」

「オイ、グヅグヅは宜いが、籠をあんなどこにおつぱり出しといちや、今に盗まれつちまふといふんだ」

「なんだ、籠を盗まれる、どこにあるんだい」

「どこにあるんだいと云つて、自分で置いて忘れてるのか、表におつぱり出してあるぢやねえか」

「フン表だ、表に置かうとおつぱり出さうと、屑屋の籠を盗む奴も

なからうちやねえか、なア、ちやんと、乃公の町處、名前が入つてお上の焼き判が、ポンと押さつた鑑札がついてるんだ」

「どうして、此の節ア物騒だせ、屑屋の籠だらうと何だらうと片ツ端からだからな」

「だれがそんなことをしやがるんだい、そんなことでもしやがつて見ろ、乃公が承知をしねえんだ」

「ハ、ハ、誰れがするか分んねえよ、誰れがするか分んねえから、物騒だつてんだ」

鐵さんはかう云つて、ヒヨイと肴を喰はふとしたが、何にも自分の前に無いのに氣がついて、

「オウ、何か呉んな」

「オヤツ、これは氣のつかんことで、何にしませうね」

「そうだな、蓮でも好いや……時にどうだい、徳さん、堀さ出しがあつたかい」

今度は徳さんの方を向いてかう云つた。

「なに……堀り出した、アツハ、そんなもんがある位なら、なんにも心配しねえがなア」

徳さんは、半分ばかり、のこつて居た酒の、また牛分ばかり飲んだ。

「だつて、莫迦に景氣が好いから、乃公またきつと、徳さん好い堀

り出しものでもあつたんだらうと思つて……」

「まつたくだ」

と、源さんも横合から云つた。

「ウムちつとばかりあつた……」

「さうだらう、でなきや、あんまり景氣がよ過ぎると思つたい……何があつたい何が……」

「なアに、堀り出しといふほどのものもねえが、今日はな、朝家を出るときにや、たつた資金が一錢しかねえんだ。だからこいつアすばしつこくやんなきや飯にならねえ哩と思つて、紙屑やポロツきれを、二遍ばかり問屋に運んで、ちつとばかり資金が出来たので、や

れ〜と思つて、ちやうど三時頃までに、一錢の金を四貫までにしたんだ』

「へエ、だから屑屋々々といふが、止められねえんだなア……」

と、鐵さんが云ふと、源さんも、

『まづたくだ……』

と、云つた、

『まア宜いや、一錢の金が四貫になつたから、今日はもうこれで歸らうかと思つたが、待て〜、もう一廻りと思つて、千駄木の方へ出かけて行くとお前、屑屋さん〜と、いやになまめかしい聲がするだらう、オヤツと思つて見ると、赤い手柄の、素敵もねえのが呼

んでるんぢやねえか』

『オヤ〜……』

女の話だと、夢中になる禿ちやんが、帳場の方からかう云つた。

『なんだね、見つともない、女の話だといふと、夢中になつてさ……頭の禿と相談をすがる好いや』

おかみはかう云つて、禿ちやんの頭をビシヤリとやつたが、ツルリと滑つて、應へのねえこと夥しい。

『何をしやがるんだい』

禿ちやんはおかみを睨みつけたが、

『何をぢやないよ。あんな女の話なんか聞いて居ないでも宜いから

今のうちに、お醤油屋に行つて來ときよ』

『今でなくつたつて好いちやねえか、今に來るよ、小僧が』

『馬鹿だね此の人は、夜になつて御用聞きに來るものがあるかへ…』

『ちや明日…』

『不可ないよ。明日の朝のがないちやないかね、何をぼんやりして
るんだい。大概分つてゐさうなもんちやないか、行つて來なよ』

『大丈夫だよ。明日そんなに暗いうちから、お客があるんちやある
めえし』

『駄目だよ。こんな稼業をしてゐて、お醤油を切らして置かれるか

へ、なんだね、女の話でもお客さんがしてると、耳を兎のやうにお
つ立てやがつて、そら今だつて、女の話が出たもんだからオヤ／＼
だど、フンさうして動けやしないちやないかね。行つて來なつたら
此の禿、行つて來ないかい、臺灣…』

おかみはなかく／＼猛烈だ。

『コレハひどい、臺灣とはなんだ』

『さうちやないかね。臺灣とはなんだなんて云つてると。人から笑
はれるよ。お前さんの頭を見な、そいつア臺灣禿げといふんだよ。
行つて來なつたらようツ』

こいつは雲行きが荒くなつた。物騒だと見てとると、徳さんの、

赤い手柄のあの先きが、どうなることかと、聞きたいのは山々だが此の上愚圖々々して居ようものなら、それこそ終ひにや薬罐が飛ぶ薬罐と薬罐の鉢合せぢやたまらないと思つたので、後に心をのこしてサツサツと出て了つた。

サツサと出たのは、一つは氣まりが悪かつたからだ。

『オヤ／＼、遂々追ひ出されやがつた』

土方の一人はかう云つた。

すると今一人が、

『意氣地のねえ野郎ぢやねえか』

と、云ふともう一人が、

『養子だせ養子だせ』

と、云つた。

話を止めて居た徳さんは、一と悶着がおさまると、

『乃公はよ、何かお拂ひでございますかと云つたら、其の御新造が云ふにやア、サイダーの壘だの、ビールの壘だのが、ドツサリあつて邪魔で仕様がなから、持つて行つてお呉れと來たんだ。サア乃公も考へたね』

『なるほど……』

鐵さんはかう云つた。

『どうして考へたかと云ふと、ほら懷中は四貫しかねえだらう。そ

れにそんなに、ごつさりあられちや困ると思つてよ』

『ウム、それからどうしたい』

今度は源さんがかう云つた。

『何本位ございませうと、先づ乃公はかう聞いたよ。すると御新造は、さう、みんなで二十本位あるだらう。みんな持つてつてお呉れ邪魔なんだから、なんでも賣ると好いお金になりますよと、酒屋の小僧さんが云つたが。好いお金つて高が空き壇だから知れてるわ。お金なんか要りませんから、皆な持つて行つてお呉れとかう來たん
だ……』

『へエ……』

と、鐵さんが眼を剝くと、源さんは、

『そいつア豪氣だ、なか／＼氣前の好い御新造だな、それからどうしたい……』

『どうしたいといつて、こんなうめえ話があるもんでねえ頬ペタを牡丹餅で叩かれて、砂糖の木にのぼつてるやうな工合さ、でも只ぢやなんですから、いくらか他のものよりかも安くいったかして貰ひませうと云つたのさ』

『なるほど……』

鐵さんは云つた。

『乃公の考へちや、四貫あるから、一貫五百か二貫も置いてかうと

思つて、すると其の御新造が云ふにや、宜いんです。お金なんか要りませんよと言つて、其處に出して呉れたのが、ビール壘が八本に正宗の四合壘が五本、しかもお前、ペーバなんかちやんとしてるんだ……ウムそれからサイダーの壘が十一本さ』

『エツ……』

と、鐵さんがおどろくと、源さんは、

『それだけ何か、みんな只で貰つたのか』

『ウム……』

『ごっさいごっさい……』

源さんは急ぎ込んで聞いた。源さん今度たまつた頃を見計らつて

抜けがけの功名をやらうと云ふ考へ、なか／＼喰へたものではない。

『乃公やあんまり氣の毒だから、いくらか置いて行かうとしたが、どうしても取らないのさ。そして、今度また此方に来たらよつて見な、家ではお客様がよく入らつしやるから、いくらもこんな壘なんかたまるとおつしやるんだ。へッ／＼／＼何しろ今云つただけ、只ですつぽと貰つたんだから、収入がどの位あつたか、フ、フ、分るだらう……』

『ウマクやりやがつたな、察するところなんだな、そりやアまだ世帯馴れねえな』

と、鐵さんは、ちよいと首を傾げて行つた。

「ウム、乃公もさう思ふよ」

と、徳さんは云つた。

「さうだとも、世帯ずれしたもんなら、なか／＼そんなもんぢやねえ、三錢と云や四錢に買へ、四錢と云やア四錢二厘に買へなんて、煮ても焼いても喰はれるもんぢやねえのに、それだけのものを只やゑるつてんだから、なか／＼さうして、世帯ずれしたもんぢやねえやど、鐵さんは感心して居る。

「オウ、ごこだい、其の御新造の家つてのは、エ、徳さんどのあたりだい、千駄木か……」

源さん根堀り葉堀りして熱心に聞く。

「駄目だよ。もうちやんと、乃公が貰ふことに約束がしてあるんだから……」

「なアに、お前のお得意を、乃公がどうしようも云ふんぢやねえが只だそんな珍らしい御新造の居るなアごこだいふんだ……」

「アツハハハ、それを云ちや、臺なしだな。なア鐵さん……」

「ハハハ、さうだとも……」

「うまくやつたなア……」
源さん、あまりうらやましくして、酒の酔ひもさめたらしい。
處へ禿ちやんが歸つて來た。

『どうです、どうになりました、赤い手柄は……』

ほんの今、其の手柄の一件で、醬油屋に逐ひやられて居ながら、門口を入ると直ぐ、もう忘れてしまつてゐる。

『ハ、大變さ、其の赤い手柄に、徳さんが惚れられて金は要んねえと云つて、空き壘の二三十本も呉れて、おまけに小使ひ錢まで呉れたつてんだ、どうです、旦那、屑屋をしてると、徳さんばかりぢやねえ、時偶そんなことがあるが、お前さんも屑屋になんすつちやア……』

『エツ、ほんとうですか、エ、徳さん、そいつア豪氣だ。よし、乃公ももうこんな居酒屋なんか止めちまつて、屑屋にならう。これで

も小間物屋か何かでえと、新造や娘つこがやつて来る。こんな稼業ぢや、来るもなアみんなへツへツ、ならうならう、そんならまゝいことがあるなら、私もなりませう……』

ど、禿ちやん夢中になつて居たが、ヒヨイと正面に、鎮座在しまつて、グツと自分の方を眺めて居る。山の神大明神のお顔を見るとグニヤリ……。首を縮めて、

『へツへツへツ、そんなこたア申戯だが……』

恐る恐る帳場の方、

『何だねえ、今の格好は、まるで狂氣じみてるよ。馬鹿野郎……』

「へエ……」

「へエぢやないよ。禿……禿……満足な頭もしてゐない癖に、若い女の話だと夢中になりやがつて、禿……禿……」

おかみは何處までもさも憎々しげに、禿々を繰りかへした。

禿ぢやんは大マゴつきにマゴついてゐると、

「オウ、勘定をとつて呉んな」

と、土方風の男が云つたのをこれ幸ひ。

「へイ有り難ふございます。エ、とお酒が三杯づつでございましたね……かうつと、三七二十一とお肴が四錢で、へイ二十五錢づつ、いたいます」

「よし来た。大分やられてるな」

と、一人がひやかすと、禿ぢやん禿をツルリと撫で、

「へッへッへッ……」

三人は各々、勘定を置いて出て行つて、

「オイ、屑屋さん、籠は誰れか持つて行つたと見えて見えねえせ……」

一人の土方は大きな聲でかう云つて行つた。

「嘘吐きやがれ——」

徳さんはかう云つたが、それでも心配になると見えて、ヨロ／＼と立ち上つて、縄暖簾をかき分けて見て居たが、籠はボカンと其處

に轉がつてゐた。

『それ見ろ……畜生奴ッ……』

再び元のところへ戻つて來た。

源さんは何と思つたか、

『オウ、勘定をとつてくんな』

と、勘定を拂つて、

『ぢや徳さんも鐵さんも、御悠くり……』

『オヤ、もう歸るのか……』

と、鐵さんが云ふと、徳さんは、

『オツ待ちな、マア宜いちやねえか、どうせ同じところに歸るんだ』

な、一緒に歸らうぢやねえか』

『マア悠くりしなよ。お前は……』

『乃公や悠くりするから、お前も悠くりしたつて好いちやねえか、一緒に行かアな』

『ンだが、乃公やアまだ歸りに、寄んなくちやなんねえ處があるんだから……』

折からドヤ〜と二三人、袈天着の若い衆が、威勢よく入つて來た。

其のドサクサ紛れに、源さんは隅に置いて居た籠を提げて出てしまつた。

それでも徳さんは、まだ源さんがゐるかと思つて、

「待ちなつてことよ。オイ源さん源さん……」

と、呼んで居る。

「のねえよ。もう歸つたよ」

と、鐵さんは云つた。

「歸つた。乃公がこんなに行つてるのに、歸つたア……」

と、詰るやうに、何遍も繰り返した。

「宜いちやねえか、歸るもなアいくら止めたつて同じだから……」

鐵さんは平氣で、舌鼓を打ちながら飲んで居る。

「どれ、乃公もそれちや歸るとしよ、オウをやち、アツハ、ハ、ハ、を

やちと云つたからつて、さう佛頂面をするない。なアオイ、禿といふよりをやちの方が好いだらう」

後から入つて來た。若衆はクス／＼笑つてゐる。

田吾作も亂暴な奴だと呆れてゐる。

「へッへッへッ」

禿ちやんも仕方なく笑つてゐた。

「オツ、勘定だ勘定だ。あアお前が心配をしてゐたが、ちやんとかうして拂つて行くせ、ほらいくらだこれだけあつたら足りるだらう……足りるとも、剩餘が來らアな……宜いか、ゴマ化しちや不可ねえせ、ほら五十錢の紙幣が二枚だぞ……宜いか……」

「へいたしかに、サウしますと九杯でしたかね」

「オイ、串戯云つちや不可ねえせ。乃公が酔つばらつてるかと思つて、ゴマ化すもんぢやねえや今日日物價騰貴に、二杯もゴマ化されてたまるもんぢやねえ、それがよ、一杯一錢のアイスクリームぢやあるめえし、一杯七錢だせ、二杯だとするといくらになるんだ、エ、オイ十四錢ゴマ化すたアあんまりだらう」

「さうでしたか、九杯だと思つておましたが、七杯でしたか」

「七杯でしたかもねえもんだ。乃公がちやんと覚えてるんだ。いくら酔つても管を巻いても、自分で飲んだ酒が、何杯かつてえ位は覚えてるんだ……」

「さうでしたつけか……ちや四十七錢のお剰餘ですな」

「エッ、四十七錢たアなんでえ……」

「でもさうなりません。七錢の七ツで、七七四十九錢の、それにお肴が四錢……」

「あつちげねえ、なるほど、コイツア乃公が悪かつた、なア、弘法にも筆のあやまり、金槌の河流れだ……ア、どつこいしよとちや鐵さん、別れるせ」

「ア、氣をつけて歸んな、乃公も直ぐ歸らア」

「さうか、あゝどつこいしよ」

腰を上げてはペタン、腰を上げてはペタンとやつて居たが、やつ

このことで起ち上つた。

『大丈夫かい』

鐵さんはかう云つた。

『ハ、ハ、大丈夫だとも……なアに大丈夫だ。酒は飲んでも飲ま
いでもつてなアハツ、』

徳さんは表に出て、籠を引つ背負ふと、彼方によろ／＼、此方に
よろ／＼、

『なア、濟まねえけどもなア……ゲープ』

何のことだか、譯もわからないことを云つて、居酒屋を出て行つ
た。

今まで隅の方で、一杯のコップの酒を、禿ちやんと縮れつ毛に睨
められながら、チビリ／＼、それこそ、舐めるやうにして、屑屋仲
間の話を聞いて居た田吾作は、此の時やつと勘定を濟まして、表へ
と出たが、

『ハア廣を東京だけあつて、どんなことさしても飯が食ふて行かれ
るもんだなア。今出て行つた屑屋の話だと、朝出る時にや一錢しか
なかつたといふ。それにあんなに酒を呑むところを見ると、ハアよ
つぼど儲かつたに見える』
と、しきりと感心して居たが、

『んだが、儲かれば儲かるで、あんな風で呑んでしまふだから、何

時まで経つたつて、うだつアあがりやしねえのだ。もしあゝなつたら、あれで一生おしまひだんべえ。情けねえもんだ。あの年をして三杯呑むところは二杯、二杯呑むところは一杯といふ風にして、儉しくやつて行きや、いくらでも残るだべになア……』

と、思ひながら、暮れきつた通りをやつて來ると、往來中で仰山な女の聲がするので、見ると徳さんといはれた。屑屋が、嬬と見えてポロ／＼の着物を着た女から、胸倉をギユツと掴まれて居るのであつた。

『ヤイ此のストコドツコイ、家ぢや妾や子供が、腹を空かしてもう歸るか今歸るか、歸つたら、米を買つて、飯を炊かうと思つて、

首を長くして待つて居りや、何時までも何時までも、手前ばかり好い氣になつて、酒を喰ひやがつて——畜生ッ、手前さへ好きな酒を呑んでりやアら嬬や子供は飢え死をしたつて好いと思つてるのかい……』

『ウムウムウム——放せよッ』

『何かウムウムだい、放すもんかね。此の野郎、此の野郎……』
と、嬬は胸倉をとつて小突き廻した。

これを見た田吾作、

『ハ、ハ、やられてるな。あんなものゝ、嬬になつたものや、子供に生れて來たものは、可哀想なもんだ』

と、笑ひながら、稻荷町の宿屋へと戻つて来た。

◆すつばぬき

田吾作は、稻荷町の宿をブラリと出た。

今日はもう一度、浅草に行つて、何か見て来ようと思ふ考へから、

もう電車に乗ることだけは、

「電車待つて呉れ……」

と、追ひかけなくとも、乗る方法を覺えたのだから、

「フン、いくらジャンジャン云はして行つたつて、待つて呉れなん

て呼ぶもんか」

グツと反りかへつて、天晴江戸ッ子になつたつもり。

稻荷町の停留所から、浅草行きあさくさの電車でんしゃに乗つた。

電車は相變らずの大入り満員……といふのは口元ばかりで、中の吊革は何れもつかまつて呉れるものもないので、無聊に苦しんで、クワラ〜と揺れて居る。

「サア、込み合ひますから、どうぞ中にお詰めなすつて下さい』と、いくら車掌が怒鳴つても、知らぬ面の半兵衛さん、

「オイ、詰めてくらのせえよ。お前さまがたばかりか金さ拂ふて乗つてるでねえだ。かうしてハア外さ立つてるもんも、同じよう

に金さア拂つてるだから、サア詰めてくらつせえちうになア……ハ
アみんな鬻かアね』

田吾作、例の野良聲を張りあげて怒鳴つた。

野良聲にはおどろいて、一樣に田吾作の方を見たが、矢ッ張り動かない。

其のうち、車掌が中に入つて、喧嘩面でやつと詰めさした。

田吾作もやつと中に入つて、吊革にブラ下がつた。

『乃公見てえな田舎もんでも、人が困る位な事ア知つてるのに、東京の人と云はれるもんが、みんな手前さへよけりや、人が困つてゐようとうとうしようとうと關はねえやうなもんばかりたアあんちうこつた』

天長様のおひざ下さ居るもんが、耻かしかアねえもんかな』

田吾作大いに憤慨して居る。

車中のものは、田吾作の顔を見て、ニヤリニヤリ、いかにも人を馬鹿にしたやうな笑ひ方をして居る。

『あにがおかしいだ』

田吾作は、持ち前の丸い眼に、些か角を立てた。

『あにがおかしいだよ』

田吾作はまたかう云つた。

それでも、田舎ものだといふので、馬鹿にしてゐる車中のものはニヤリニヤリ。

田吾作、本式に眼に角を立てた。

『ハア、乃公が云ふことがをかしいのけえ』

ギロリと見廻す。

『をかしけりや、勝手にいくらでも笑ふが好えや、フン、乃公が云ふことがをかしい位思つてるから間違えだといふのだ。よく考へて見るがえ、でねえか』

田吾作、口の端に泡を吹いて、バツバツと飛ばすので前に居た男が、

『アツきたねえツ』

袖で顔を拭いたが、田吾作はそんなことは、耳にもかけなけりや

眼もくれない。

『人が外さ立つてるのを見たら、あの人も乃公と同じように、金を拂つて乗つてるだからあゝして立つてるといふなア、氣の毒なもんだと、空いてる方につめてやるが當り前でねえか、そんなこと位は車掌さんが云はなくつたつて、手前たち手前たちで心得てゐさうなもんでねえか』

田吾作の氣焰當るべからず。

此の場合、何か云つて、反抗でもしようものなら、それこそ松の木はやうな、節くれ立つた、見せたばかりでも、子供は泣き出さうといふやうな、素相滅法界な、拳骨を振り廻さないとも限らない位

の勢ひ。

「汚ねえなア……」

前に居た男は、遂々起つて、二三人措いて彼方に行つて、吊り革にブラ下つた。

すると直ぐ傍に居た男が、あはて、其處に腰かけた。

まるで喧嘩越しで、眼は血走つてゐた。

すると今度は、押され押されて、若い女が來ると、今血眼で腰かけた男が、

「おかけなさい」

と、云つて起ちあがつた。

「否え、もう直きに下りますから……」

と、女は辭退して、また押されて先きに進んだ。

男は間の抜けた格好で、また腰かけたが、今度は、また髪を女優巻きにした。安淫賣のやうな女が來ると、

「おかけなさい」

其の男はまた起つた。

まるで此の男は、女に席を譲るために、座席を占領してゐるかの觀がある。

「有り難うございます」

と、女はそれを當然のやうに、腰かけようとするとき、いきなり田

吾作は、ムツと腰かけた。

男は眼を三角にして、

『オイ、君、何だつて腰かけるんだい……』

男は田吾作の、肩のところをちよいと摘んで、引き立てようとする。

『ハア腰かけて不可ねえかね』

と、とぼけた顔、

『當り前ぢやないかね。何も君に腰かけさせる位なら、僕が腰かけて居るよ。此の婦人の方に譲つたんぢやないかね』

『女ちよは腰かけて好いが、乃公は腰かけてなんねえちうなア、あ

ちよ(ごう)してだアね』

田吾作は口の端に泡を吹く、

『あぢよも糞もないよ。立ち給へ。立ち給へ』

男は無理に田吾作を立たせようとする。

ところがどつこい、田吾作動かない。

『聞くべえよ。此の電車は、お前がハア買ひ切つてるのけ』

『たとへ買ひきつてゐなくつたつて、僕が今まで腰かけて居たんぢやないかね』

『ハア今までは腰かけてゐたにせえ立つたあとに、誰れが腰かけようど、宜えでねえか、一旦腰かけてたここは、何時までもお前のだ

「こといふぢやあんめえし」

『仕様がないなア、田舎つべは……』

田吾作は喰ひつくやうな勢ひを示して、

『コリヤハアおもしれへ、田舎つべがどうしたちうだ、お前たち見てえな、助平な奴があるから、女ちよの分際として、大きな面をするやうな奴ばかり出来るだよ。それがよ、子供か、ンでなきやア年でもとつてるとか、餓鬼でも背負つてるちうなら、あんだが若えピンピンしてるものに……何も自分で腰かけてゐたものを、立つてまで腰かけさしなくつたつて宜えだ。ンだから何時電車に乗つても、乃公に腰かけを譲れてな面をしてるだアよ。お前見てえなもんがある

て、そんな癖さつけるだから、髻を生した旦那が、餓鬼を背負つて嬢の風呂敷包みを持つて、嬢のお供をしなくちやなんねえやうになつて来るだ。老人か子供なら、譲つてやつても宜えが、若えピンピンした、情男の四五人も有つてるやうな女に、あにも譲つてやることアね……見ろ、可哀想に、六十越えたお婆さんが、あすこで押され揉まれて、ウムウム云つてるでねえか、腰かけを譲るんならあんな人にゆづつてやるもんだぞ宜えか……』

何と云つても、田吾作動くことではない。

『何を云つてやがるんだ。田舎つべの癖に……』

若い男はブンブン怒つて居る。

「フン濟まねえけどもなア、田舎つぺでも物事はお前たちよりも分つてるだアね、ハ、、、」

齒クンだらけの齒を剃き出して、遠慮もなく高笑ひ。

女もいけずかない田舎つぺがといふやうな面。

相方黙り込んだが、田吾作が見て居ると、若い男は、電車が揺れる度に、女の方によろよろツ、故と女の體にさはつて、

「いたかつたでせう、御免なさい」

又揺れるとよろ／＼ツ、

「アツ失敬、足を踏みやアしませんかつたですか」

一々詫びをしてゐる。

「いやな野郎だ、故とぶつつかつてゐやがつて……」

田吾作苦々しく思つて見てゐると、込んでゐるのを幸ひに、男は女の手をソツと握つた。女は振り放さうともしない。

「あんだねお前は、成るほどハア分つた。女ちよに腰かけを譲らうとしたのは、ハアあにか、考へがあつてだな。電車の中で手を握つたり、故とぶつつかつたりして乃公はアぶつたまげてものが云へねえハ、、、」

田吾作は露骨にスツバ抜いたので、道がに厚顔の若い男も、眞紅な顔をして、俵町でコソ／＼降りて行つた。

「ハ、、、痛快だつたなア」

と、云ふものもあれば、

『どうもいやな奴だと思つてゐたよ』

『女も女ぢやないか』

『どうせ淫賣か何かさ……』

と、云ふやうな聲が、其處でも此處でも起つた。

女も眞紅な顔をして、俯向いたまゝ、顔を上げ得なかつたが、東仲町で逃げるやうに降りた。

『ハ、ハ、ハ……油断も隙もなんねえ』

と、高笑ひ、

雷門で降りて、観音様に参詣して、活動の前をブラ／＼歩いて

花屋敷の前に来た。

『此處さ一番入つて見べえ』

と、田吾作切符を買つて入つたが、間もなくふくれつ面をして出て来た。

『あんだあの芝居は、大井だか小井だか知れねえが、あれではア座頭もねえもんだ。いくらあんでも、あんな下手芝居を、人に見せるたアあんまり馬鹿にしてる、乃公が村の若え衆だつて、あの位どころかもつと上手だ。ンだが、これも村さ土産話だ……ハテ役者の名前を忘れねえやうにして置かなくちやなんねえ。コウツトさう／＼大井憲一郎ちうたな、あんな下手芝居を、見るもんがあるかと思ふ』

ど、ハア乃公そんな人たちの氣が知んねえだ』

田舎者でも此の節は、なかく馬鹿にしたものにあらずだ。

◆ どうぞ どうぞ 議員の致命傷

東京見物に六日間を費した田吾作、

『ハアあんのこつだい。東京東京ちうから、極樂見てえなどこだと
思つたら、まるでハア泥坊と詐欺と人悪との寄り集まり見てえなと
こだ。もうハア麥が大分伸びたべ……あんちうても、乃公が村より
好えと思はねえ』

と、女房お畑や娘のお芋への、土産ものをはじめとして、隣近所へ

やる土産も買ひ込んで、上野のステーションにやつて来る。

ヒョイト二等待合を覗くと、正面に陣取り、若い藝者にもたれる
やうにして、葉巻きの煙をプカリプカリやてゐるのは、正しく三度
までも態々訊ねて會えなかつた。代議士口瀬口市、

田吾作はツカヅカ、信玄袋を背負つたまゝ、口瀬代議士の前に來
て、

『ハアお前さまは、口市ごんでねえか、乃公ハア今度東京見物さ來
ただから、お前様を訪ねて見べえと思つて、ほらお前さまたちが、
論判をするとは何とか云つたのう。さうさう衆議院とかの前でどつ
かの旦那に、お前さまの泊つてゐる宿を訊いて貰つて、三度も行つ

たが、何時行つても居ねえ、昨夜も歸らねえ、昨夜も歸らねえといつただが、ハハハハハ歸んねえ譯だ、ハアこんな美しい虫がついてるだから……何かな、法の美しい虫が藝妓ちうもんかの、今日は何處さ行かつしやるだよ。美しい虫を連れて……罪だアよ。お内儀さまは見さつせえの、奉公人と一しよになつて、芋を掘つたり、葱の施肥をしたりしてゐるでねえか、それにハアお前様は、いくらこくきやアぎんハテナこくきやアぎんのことを、何とか云ふたけねエ、さうく、代議士か、そんな代議になつたからちうて、こんな美しい虫と、乳くり合ふて、物見遊山をするたアあんまりだべ、へへへへ……』

□瀬代議士、悪い奴に見つかつたと思ふうちに、田吾作はお關心もなく、ペラペラペラ、

□瀬代議士、忽ち眞紅になつた。面から火の出る思ひ、先刻から傍若無人に、藝妓といちやついてゐたのを、面憎く思つてゐた待合客は、ドツと聲をあげて笑つた。

「痛快……痛快……」
と、叫ぶものもある。

□瀬代議士は、田吾作には何にも云はずに、

「オイ、まだなかくだ。出直すでしょう」
藝妓をうながして立ち上つた。

「オヤツ、お前様、乃公を知んねえこたアなかつべえ。乃公が物さ云つてるに、あんだつて返事もしねえで行くだアね。ハハア分つたンぢやあんだな、乃公見てえな百姓と、口を利くと見つたくねえちうので、逃げて行くだな、ンぢやンで宜え、乃公だつて考へがあるだから、フン選挙の時は、どうでえ何卒一票賜りてへのかしこのと云つて、頭をペコペコ下げて来やがる癖に、そつちがそんな考へなら、乃公も村さ歸つて、あんな藝妓買ひ代議士は止める止めろちてみんなにこれから、お前に投票しねえように云つてやるだ。いくら一票三圓出すだの、三圓五十錢出すだのちうても駄目だぞ。あんだ乃公たちの爲めに論判に来るのか、藝妓買ひに来るのか、どつちだ

かちつとも分んねえ。そればかりぢやねえ、乃公歸つて、お前さまのお内儀さまに、さう云つてやるだ。お前さまとこの口市ごんは、若え藝者を連れてこれこれだと、ハアさうしたら、お前さまは入り婿だから、なか／＼容易ぢやおさまるめえ、ンでなうても、やきもちぢやなか／＼人に負けねえおかみさまだで、また薪割をふりかぶつて、お前さまを追ひかけるだ。さうなつて、小さくなつて慄へねえが好え……」

「オイ、行かう……」

口瀬代議士は、耳にもかけぬ風をよそほつてはゐるが、たしかに彼れにとつては、田吾作と此處で會つたのは致命傷だつたのだ。

待合室は、

「痛快……」

「百姓議員……」

「どうく議員……」

などと叫んで、ドツドと笑つたので、口瀬代議士踏ん反りかへつて、藝妓といちやついてゐた。

初めの面目はどこへやら、藝妓を連れてコンコン……と出た。

田吾作はあと見送つて、

「畜生奴がッ……」

「成田佐原ア行き……」

と、云ふ發車の知らせ。

「待つて呉れ、待つて呉れ、乃公成田の方さ歸るもんだ……」

あたふた切符を買つて、汽車に乗り込んで。

「ヤレヤレ、これでお畑やお芋の顔が見られるわい……」

田吾作はホッと息をついた。

やがて汽車はウワン……

ゴツト、ゴツト、ゴツト、ゴツト。

滑稽諷刺 田 吾 作 終

□ 大正八年十月廿五日印刷
大正八年十一月二日發行

【定價六拾錢】

編輯者兼

東京市神田區錦町三丁目六番地

樋口 紋太

印刷者兼

大阪市南區安堂寺町四丁目六〇番地
又 間安次郎

印刷所

大阪市西區靱上通貳丁目貳拾五番地
精華堂印刷所

不許複製

□ 發行所

東京市神田區多町壹丁目
大阪市心齋橋安堂寺町西

精華堂書店

振替口座大阪壹貳九〇〇番

182



終

